ものが含まれてゐる。瓦甎、鴟尾、畫像石等に次いでガラス或ひは漢代の絹、簡札が取上げられる。樂浪の遺物を中心とした五篇の論文中では殊に木棺或ひは杯が文獻と相俟つて考察されたのは注目すべきものである。而して「考古學上より見たる東西古文化」の關係を概觀されては、漢と大秦との文化交流をガラスと絹もて述べられ、唐と波斯サッサン朝との關係を胡瓶と獅子狩文樣の例もて論じて居られる。最後は我が古墳出土品と支那六朝遺物との關係である。

以上が本書集錄の諸論文の大體の紹介であるがその根幹は既に述べた如く唐代文化の闡明から正倉院御物への關心となりこゝに著者の支那考古學開拓の方法は定まり、而もその研究方向が遂に東西兩文化の交流關係に發展されたものであることを知ることが出來た。從つて本書集錄の諸論文中の諸事項に關して稍重複する所が多い。そのことは我々が特に本書にこそ卷末索引の必要を痛感する所以である。更に希望を述べるならばその後の新しき資料或ひはそれに本づかれる最近の見解等を簡單に追記されたらとの念一入である。

〔澄田　正一〕

東洋史上の日本

志田不動麿著

昭和十五年十二月、東京四海書房出版
本文三三八頁、定價三三〇

われらが國史として學んだ日本の歷史を東洋史の立場から見なほしてみることは、面白いといふのみでなく學問的に重要であるといふ提言をしば〳〵耳にしたものは緒言によると著者志田教授の六年前からの課題であつた「日本を中心とせる大東亞の歷史的相互關係を具體的に內容づけその間を貫く一系の活力筋を見いだし將來の指導原理たらしめる」企ての成果たる本書「東洋史上の日本」を手にして、待望の好著をえたことを喜ぶであらう。現實に對するはげしい關心と共に、學徒としての眞摯な勇氣をこめられた本書には、東部アジア、卽ち日本海・黃海支那海によつて、孤立させられたのではなく結びつけられたる日本はじめ朝鮮・滿洲・蒙古・支那、更に南方の地帶において興起せる諸民族及び諸國家の政治・經濟的交涉の歷史事情が相互の史料を對校し、既出論著に參據し、平明周密な筆致を以て詳述されてゐる。分つ所は序論の外十章、終りに結論、參考書目及び索引を附してある。

序論においては、東亞における先進國であつた支那の華夷思想を檢討することにより外交關係に現れてくる推恩・朝貢・侵寇等の諸形式を指摘し、第一章古代の日支關係において支那的世界と接觸し始めた三韓・日本の狀態を說明される。この場合にも經濟史的觀點、殊に周末支那社會內部の發展を考へる如き態度は外交的事實の叙述に或る確かさを與へる樣に見える。これは全編を通じて看取される所である。

第二章「大化改新前後の日支關係」では聖德太子の御努力により日隋の關係が對等的に行はれたこと、中大兄皇子による日唐交通の盛大と國內改革との關係を半島の形勢を顧みつゝ述べ第三章「奈良時代」には前代の政治的多難を脫し、日・唐・新羅・渤海の間に平和で輝かしい國際舞臺が開かれたこと、及び國家的自覺のもとに活躍したわが遣外使臣の行動を記し、第四章「平安前期」に入りては、各國の並行的な政情不安が外交不振を來し、遣唐使派遣に代り私的貿易が始まり、その貨物はアラビア・ペルシアの商人が支那に船載した物の一部の轉賣であつたことに注意され、第五章「平安後期」には前代と一變し宋・契丹・高麗と院政時代、源平時代のわが國との交渉が日支商人の活躍や海賊の跳梁のうちに行はれたことを述べ、第六章「鎌倉時代」に引きつがれ、元寇や支那の市舶司及び南海貿易と共に、宋錢の流出がわが國經濟の發達に與へた影響の如き重要な現象が說明される。

第七章「室町時代」には、琉球と南洋とが始めて姿を現し、足利氏と明との間の國家的體面か經濟的需要かを廻る外交につき記すと共に彼我の文化的交涉にも一節を割き、支那人の日本に對する知識の發達といふ新しい事情を指摘してある。

第八章「近世初期に於ける日本の發展」において、戰國末期より織豐・德川初期時代におけるわが商業資本の未曾有の發展に伴ふ邦人の海外發展と共に、西・葡・蘭・英諸外國商人の、來航基督敎の宣傳の有樣が展開され、東亞の新情勢の到來を感ぜしめられる。しかるに第九章「江戸時代」に入り、幕府の鎖國政策が蘭・支二國との長崎貿易、島津氏の琉球貿易以外の諸交涉を殆んど斷絕させたことが記されるが、第十章「明治維新と其の後の日支關係」において吾等の耳目に遠からぬ明治以後のわが國力の發展を中心とする重要な諸事件が論述せられ、現下の情勢にまで著者の史眼は及んでゐる。

上述の諸章の區分はおほむねわが國史の時代わけに從つてゐる樣である。これは日本を中心とする以上もとより然るべきであるが、そのため支那や滿鮮の諸王朝の時代と一々對應させつゝ東亞における國際關係の發展を說明する結果、叙述の前後や重出が少からず見うけられ國際事件の展開の筋道が稍明瞭をかくの如くである。然し讀者に多少の豫備知識があればこれは大した困難でなく、日本が支那文明に接し始めた頃から、東亞を指導しつゝある現代に及ぶまでの情勢が相互に別つことのできぬ關聯をもつて鮮かに浮んでくる。一部において、日支並びにアジア諸民族の文化交流の事實を過少視する議論が唱へられる時、單なる支那史でもなく、また滿蒙史、その他一民族一地方の歷史でもない、勝義における東洋史的觀點に立つた本書の出現は、史實の考定と記述以上に學界に新しい視野を示すであら

う。それ〴〵の關心をもつ專攻分野における實證的研究の着實なる歩みと共に、東洋史を學ぶ以上何人も拒否する能はざる共通の根柢の自覺が必要なること今日に過ぐるはない。本書は少くともこの問題への大きな寄與として、たかく評價せらるべきものと信ずる。

〔宮川　尙志〕

乾隆京城全圖　附解說索引

興亞院華北連絡部政務局調査所發行　非賣品

府縣志の類に附せられた一、二葉の零細な地圖でも屢々役立つて有難い思ひをする。文章で如何に記されたとしても一片の簡單な地圖の存在に及ばない場合は必ずしも其の例に乏しくはないであらう。北京などに就いても矢張りかうしたことが云はれるのであつて、日下舊聞考を始めとし幾多の史蹟關係の書籍があるにも拘らず、これらには殆んど地圖が存しない爲、其の位置や狀態を明かにするのに困難する場合に逢着することが稀れではない。然るに今から數年前、故宮の內務府造辨處與圖房から最大にして最古の北京市街圖が發見された。其の經緯に就いては既に今西學士が本誌第四卷第六號に「乾隆北京地圖に就いて」と題して紹介されたところである。だが殘念なことにはかうした見事な地圖があつたとしても、これを利用することは限られた者のみに許されるに過ぎず、更に事變前、中國營造學社が出版を計畫すると云ふ樣なことも無いではなかつたが、寫眞撮影に止り、未だ印行するには至らなかつた。それを先般、たま〳〵同學士の紹介に依つて知り得た興亞院華北連絡部政務局調査所が複印することゝなつて、研究者の便宜に資せられる樣になつたことは誠によろこばしいことであつた。

原圖は大約六百五十分の一だと云はれるが、複印圖は更に原圖の十六分の一に縮寫したもので、從つて二千六百分の一の地圖として再現された譯である。今披見するに、コロタイプ版に依つたが、技術の至らぬ爲文字など不鮮明となつたところも認められる。然し兎も角現地の印刷屋の仕事としては上出來と云はねばなるまい。而もこの缺點は索引に依つて全く補はれて居る。此の地圖は宮殿樓屋橋梁池川の類が一々詳細に鳥瞰圖式に描かれ、勿論蠢魚の損じた部分も少くないが、これに依つて配置のみならず、建築の樣子なども窺はれるのである。面白いのは北堂の天主堂には十字架が現はされ、その左右には龍が居り武英殿には例の香妃が用ひたと俗に傳ふる浴德殿のトルコ式風呂があるかと思へば、天慶寺の風呂は未だ築造されて居なかつたと見えて何等記すところがない。其の他かゝる例を擧げたら際限がない。猶附屬の解說は今西學士の執筆になり、本圖の體裁と規模を述べ、繪修年代を考證し、其の源流を考へ、此の圖以後の製作にも觸れ、淸朝時代遂に比肩すべき地圖の作成せら